

# 第一部 イエズス会史料における中近世移行期権力

## 第一章 ルイス・フロイス書翰の日本語表記

はじめに

一五六九年六月一日（永祿一二年五月一七日）付、都発豊後のベルシヨール・デ・フィゲイレド宛ルイス・フロイス書翰は、その時期の畿内情勢を考察する上で貴重な史料となっている。この書翰には、堺に避難していた宣教師が、京都復帰を果たして織田信長や足利義昭に謁見するまでの経過が記されており、その後日乗という一人の仏僧によって京都居住が困難になっている状況を伝えている。また、二条城普請、日乗とフロイスの宗論、宣教師宛信長朱印状、伴天連追放の論旨など重要な内容が含まれており、有名な信長の人物評も、この書翰に書かれている。

こうしたことから、同書翰は邦文史料を補足する史料として頻繁に取り上げられてきた。しかし、同書翰に限らず、これまで引用されてきた宣教師の書翰は、エヴォラ版日本書翰集<sup>①</sup>に収められたもので、いわば書翰の写しであった。周知のように、このエヴォラ版日本書翰集は編集時に原文の一部省略あるいは改変がされていることが指摘されており、史料価値という点では二次史料として位置づけられている<sup>②</sup>。しかしながら、研究者の間では今なおこの史料集が使われている。さらに研究者の中には、より史料価値の劣るフロイス「日本史」を無批判に扱っている研究者も少なくない<sup>③</sup>。このように、今日まで日本で宣教師の書翰を扱った研究のほとんどは、二次史料によつて進められてきたといえるのである<sup>④</sup>。つまり、原文書や他写本の校合を行った研究は、日本ではほとんどなされてこなかったというのが現状である。

以上のような研究状況に鑑み、本章では本書翰の史料分析を行いたいと考える。ただ、本書翰はフォリオ数（葉数・丁数）一三葉にもおよび長文書翰であり、前述したように重要な内容も多い。本来ならば、書翰全文の検証および訳文の掲載が理想であることはいうまでもないが、それでは多くの紙数を必要としてしまう。また、本章の目的は翻訳を行うことではなく、史料分析と諸写本との校合にある。そこで、本書翰の検証はテーマ毎に行っていくことにし、本章では日本語表記に注目したい<sup>⑤</sup>。

### 一 リスボア国立図書館所蔵フロイス書翰について

イエズス会宣教師の書翰が多く所蔵されている機関といえば、ローマ・イエズス会文書館（Archivum Romanum Societatis Iesu）が第一に挙げられる。フロイス書翰も多くが同館に収められている。しかし、今回検証する一五六九年六月一日付フロイス書翰については所蔵が確認されていない。松田毅一氏によれば、現存する本書翰はすべて写本で、エヴォラ版書翰<sup>⑥</sup>とリスボア国立図書館所蔵書翰<sup>⑦</sup>（以下、リスボア蔵書翰とする）しかない<sup>⑧</sup>。

このうち本章で検証するリスボア蔵書翰については、すでに岡本良知氏が紹介しており<sup>⑤</sup>、特に新出史料というわけではない。その後、松田毅一氏も「欄外に日本語の葡訳を附記してある」など、本書翰の概要を伝えている<sup>⑥</sup>。しかし、松田氏は本書翰の詳細な検証と翻訳は行っておらず、エヴオラ版書翰の方を使用しているようである<sup>⑦</sup>。そして、現在にいたってもリスボア蔵書翰の全容が明らかにされていない。

このリスボア蔵書翰がエヴオラ版書翰と大きく異なる点は、松田氏も言及している日本語のローマ字表記（以下、日本語表記という言い方をする）である。もちろんそれはエヴオラ版書翰にもみられるが、リスボア蔵書翰はその比ではない。エヴオラ版書翰では、日本語表記の大半をポルトガル語訳して収載していることから、エヴオラ版書翰よりもリスボア蔵書翰の方がフロイスの自筆書翰の体裁に近いといえるだろう。しかしながら、エヴオラ版書翰に記載されている内容が、リスボア蔵書翰にない箇所もある。これはエヴオラ版書翰にみられるような省略という性格のものではなく、単なる脱落ではないかと思われるが、フロイス書翰の復元には両書翰の校合が必要である。

従って本章では、そのうちリスボア蔵書翰の日本語表記を取り上げ、エヴオラ版書翰との違いを検討することにする。

## 一一 日本語表記箇所の検討

リスボア蔵書翰を見ていくと、日本語表記の部分に下線が引いてあり<sup>⑧</sup>、欄外にその日本語のポルトガル語訳が付されているのは松田毅一氏の指摘通りである。その数は約六十箇所に及ぶ（表参照）。内容は地名・人名などの固有名詞から宗教に関する語句、日常的な語句など様々である。なお、ポルトガル語による説明文は、フロイス自身が記したものはなく、写本を作成する際に記されたものと思われる。以下、各項目に分類して検証する。

### 1 政治関連記事

#### A 年寄衆Toxiorixu(表No.1)

畿内布教担当の宣教師は、永禄八年（一五六五）に出された伴天連追放の女房奉書によって、京都退去を余儀なくされていた。堺に逃れていたフロイスは、足利義榮擁立に尽力した篠原長房を頼って京都復帰を試みていたが、復帰を果たせずにいた。そこへ織田信長が足利義昭を奉じて上洛したのである。そこでフロイスは信長から京都復帰を認めてもらおうとした。本書翰にはその件に関する記事が書かれている。

本書翰には、フロイスが堺で佐久間信盛と和田惟政を訪問したことが記されている。まず、フロイスが堺で信盛と惟政を訪問した事実について確認してみたい。松田毅一氏によると、フロイスが京都に向けて堺を出発した日は永禄十二年三月九日である<sup>⑨</sup>。従ってその直前に訪問したことになるが、この時期両人が堺接収の奉行となっていることが邦文史

料から確認できる。二月一日、信長家臣佐久間信盛・柴田勝家・坂井政尚・森可成・蜂屋頼隆と、公方衆和田惟政・結城進齋等が奉行になっており<sup>⑤</sup>、四月一日には堺に宛てて佐久間信盛等連署状が出され<sup>⑥</sup>、用脚の催促をしている。この間堺でフロイスが兩人に会った

ということとは十分に考えられるので、フロイスの訪問は事実であると判断してよい。

フロイスの訪問が事実であることを確認したところで、訪問した時の佐久間信盛に関する記事を引用しよう。

【史料1 a (リスボア蔵)】<sup>(20)</sup>  
一万五千の兵を率いており、尾張の国王信長の主たる年寄衆「年寄り（説明部分、下同様）」である佐久間殿

Sagunadono que tras quinze mil homens consigo que he o principal Toxiorixu [Velho] diante de Nobunanga Rey de Voary

【史料1 b (エヴォアラ版)】<sup>(21)</sup>

一万五千の兵を率いており、尾張の国王信長の政庁の主たる人物である佐久間殿

Sacunadono, que traz quinze mil homens consigo, & he o principal da corte de Nobunanga Rei de Voari

両書翰の違いは、佐久間信盛が信長家臣団の中でどのような地位にいるかを説明した部分である。エヴォアラ版書翰で「principal da corte」「政庁の主たる人物」となっているところが、リスボア蔵書翰ではToxiorixuと日本語表記がされている。読み方はフロイスの日本語綴り<sup>(22)</sup>から「トシオリシユ」となる。そこで、Toxiorixuは「年寄衆」と当ててよいだろう。ただ、その説明部分がVelho「年寄り、老人」となっているのは明らかな勘違いである<sup>(23)</sup>。もちろん、フロイスがこのような誤りをするはずがないので、欄外に見られる説明部分はフロイス以外の人間が記したことになる。このような説明部分の誤りが示すように、エヴォアラ版書翰ではToxiorixuの意味が分からなかったため記されなかったと考えられる。

なお、フロイスが佐久間信盛を「主たる年寄衆」と説明した点であるが、この頃信盛は柴田勝家とならぶ織田信長の重臣であるので、特に問題はない<sup>(24)</sup>。

## B 守護代xuguday(表No.2)

佐久間信盛の記事のすぐ後に和田惟政に関する記事がある。次に挙げる箇所は和田惟政を説明した部分である。

【史料2 a (リスボア蔵)】<sup>(25)</sup>  
今はこの山城国や(撰)津国の守護代「執政官、あるいは副王」で公方様に大変寵愛され、そのため全ての者から大変敬われ、信長からも劣らず寵愛を受けている和田伊賀守殿

Vata inga Nocanidono, que he agora xuguday [Regedor, ou visorey] deste reyno de Iamaxiro, & qunquini em extremo aceio ao Cubusama, & por essa causa muy venerado de todos & não menos privado de Nobunangua.

【史料2 b (エヴォアラ版)】<sup>(26)</sup>

別名和田伊賀守殿と称し、今はこの山城国や(撰)津国の執政官、あるいは副王であ

り、公方様に大変寵愛され、そのため全ての者から大変敬われ、信長からも劣らず寵愛を受けている和田殿

Vatandono que por outro nome se chama Vandaigano Camindono, que he agora regedor, o u Visorei deste reino de Iamàxiro, & Cunucuni em extremo aceito ao Cubòcama, & por es sa causa mui venerado de todos & não menos privado de Nobunanga.

ほぼ同じ内容ではあるものの、表記がかなり異なっている。その違いは次の二点である。第一にリスボア蔵書翰にみられるxugundayという表記、第二に「和田伊賀守」の説明である。前者は、リスボア蔵書翰ではxugundayと記され、欄外にregedor, ou visoreyと記されているが、エヴォラ版書翰ではregedor, ou Visoreiしかない。そこからエヴォラ版書翰の表記はxugundayのポルトガル語訳であったことが分かる。

このxugundayであるが、読みは「シユグダイ」となるので、「守護代」のことを指していると思われる。従来、エヴォラ版書翰によったため、「執政官、あるいは副王 (regedor, ou visoray)」について様々な解釈がなされてきた。脇田修氏は、フロイスが村井貞勝に対しても同様に記した例もあることから、所司代か京都奉行を指すのではないかと推測している<sup>(83)</sup>。しかし、「守護代 (xugunday)」と判明した以上、所司代や京都奉行との関連性は否定される。

和田惟政の説明が「山城と摂津の守護代」となっていたことが分かったところで、この記述が正しいかどうかについて検討しなければならない。この点については、すでに脇田氏が明らかにしている<sup>(84)</sup>。和田惟政は池田勝正・伊丹忠親とともに三守護とされ<sup>(85)</sup>、「摂津国の守護代」という表記は領ける。一方、山城国守護については邦文史料では管見に触れない。山城国守護は元龜三年五月八日に山岡景友が足利義昭から上山城の守護に補任されているが<sup>(86)</sup>、それ以前は將軍直轄地であったようである。おそらく、惟政が京都での政務も携わっていたことから<sup>(87)</sup>、フロイスは「山城」という表記も付け加えたものと思われる。

次に、「和田伊賀守」の説明である。リスボア蔵書翰がVata inga Nocamidono「ワタ・インガ・ノカミドノ (和田伊賀守)」という表記だけであるのに対して、エヴォラ版書翰ではVatandono「ワタンドノ (和田殿)」の別称としてVandaigano Camindono「ワンダイガノ・カミンドノ (和田伊賀守)」と記されている。エヴォラ版書翰の方が詳細に記されているが、フロイス自筆書翰がどちらの記述に近かったかは判断できない。

### C 内裏Dairi(表No.14)

下線部と説明部分のある箇所は一ヶ所しかないが、「内裏」という表記自体は随所にみられる。「内裏」と表記するようになったのは、ガスパル・ヴィレラが畿内布教を展開する頃で<sup>(88)</sup>、以後宣教師の書翰にはよく用いられている。そのため、この表記自体は特記すべき事項ではない。注目すべきは、その説明部分である。そこにはEmperador「皇帝」と記されている。Emperadorという語句はザビエル布教期には使用されず、日本の権力者にはrei「国王」が使用されていた<sup>(89)</sup>。このEmperadorが使用され始めるのもヴィレラの畿内布教の段階である<sup>(90)</sup>。

Emperadorが用いられる初見は管見の限り<sup>(91)</sup>、一五六四年七月一五日(永祿七年六月七日)付、都発ポルトガルのイエズス会員宛ガスパル・ヴィレラ書翰で、「公方と称する皇帝」(B

mprador chamado Cubô) 」という箇所<sup>(33)</sup>である。以降將軍に対してはEmperadorはよく用いられている。一方、天皇に対しては、その初見が一五六五年四月二七日(永祿八年三月二七日)付、都発インドの修道士等宛ルイス・フロイス書翰の中の「内裏は全日本で最も名誉のある君主で、かつては皇帝であったが、今ではもう従う者がない(Dairi, que he o Shōr da mais honra de todo o Iapão, antigamente Emperador, mas ja agora não obedecido) 」という部分である<sup>(34)</sup>。天皇は「名誉の君主」で「かつては皇帝」と書かれている点で將軍と異なるが、両者に対して「皇帝」を用いている点は看過できない。

本書翰でも「内裏」の説明部分に「皇帝」が用いられており、これが「かつての皇帝」という意味で用いられたかどうかは定かではないが、信長時代においても天皇を「皇帝」として理解していたということは興味深い。

#### D 御朱印(表No.41)

「御朱印」という表記は、フロイスが信長に京都滞在を許可する朱印状を求める場面で使われている。該当箇所を引用しよう。

【史料3a (リスボア蔵)】<sup>(35)</sup>  
都に自由に滞在できるための制札すなわち許可状である彼(信長)の御朱印「すなわち、許可状」

o seu goxum [i o placet provisão] que he hum xeisat ou patente per poder estar livremente no Meaco,

【史料3b (エヴォラ版)】<sup>(36)</sup>

都に自由に滞在できるための許可状である彼(信長)の御朱印

o seu goxum, que he huma patente pera poder estar livremente no Miáco

両書翰を比較すると、リスボア蔵書翰にのみxeisatという語句がある以外は、綴りの違いを除いて同文である。ちなみに、「」のxeisatも下線部と説明部分はないが、日本語表記で「制札」のことである。エヴォラ版書翰では「」のxeisatの意味が分からず省略されたものと思われる。「御朱印」はしばしば「許可状(patente)」という説明がされているが、【史料3a】から、宣教師の間では「制札」(xeisat)とほぼ同じ理解をもっていたことが分かる。

「御朱印」の説明部分にはplacet provisãoと書かれている。placetはイタリア語で「是認・許可」<sup>(37)</sup>、provisãoはポルトガル語で「命令」という意味がある。そこで「御朱印」は許可を指示した命令書、すなわち許可状ということになる。また、本書翰には別の箇所でも朱印状の説明しており、そこには「御朱印と称する赤い印のある許可状、すなわち私たちの言語で信長の命令書(a patente a do sello vermelho que se chama Goxum, & en nossa lingua, mandado de Nobunanga) <sup>(38)</sup>」と書かれている。つまり、宣教師に与えた朱印状は、彼らの間では「赤い印のある許可状」という理解だった<sup>(39)</sup>。

#### E 御高印(表No.48, 57)

信長と同様足利義昭も宣教師の京都滞在を許可する制札を与えた。本書翰にもその記事

がみられる。義昭が与えた制札は「御宣旨」という言葉で説明されており、リスボア蔵書翰には二箇所確認できる。一箇所はエヴォラ版書翰と同文、もう一箇所はエヴォラ版書翰には見られない。最初の箇所は「公方様の許可状すなわち御宣旨」[命令書] (a patente, ou guogensi [Madado] do Cubocama)」と記されている<sup>(35)</sup>。御宣旨も朱印状と同様「命令書」との理解である。もう一つは、「御宣旨」[彼(義昭)の安全保証、許可状] (Gogensi [sua seguridade ou patente])」<sup>(36)</sup>とあり<sup>(37)</sup>、エヴォラ版書翰では「安全保証 (seguro)」<sup>(38)</sup>となっている<sup>(39)</sup>。御宣旨は宣教師の安全を保証した命令書であると考えられていたことになる。

不可解なのは、御宣旨が將軍の「許可状」として理解されていた点である。將軍が宣旨を出すとは考えられず、これはフロイスの誤認である。その証拠にフロイス「日本史」の該当箇所を見ると、「御宣旨」ではなく「制札」と改められている<sup>(40)</sup>。フロイスは書翰では義昭から出された制札を「御宣旨」と記したが<sup>(41)</sup>、後に誤りに気付いて「日本史」では「制札」に改めたものと思われる。

## 2 宗教関連記事

宗教関連記事は当然のごとく来日当初からみられ、早い段階から日本語表記もされている。従って、本書翰に見られる日本語表記は目新しいものではない。本項では説明部分に特記する事項があれば検証することにし、エヴォラ版書翰との校合の方を重視することにした。

### 『一向宗(表No.5)』、法華宗(表No.17, 22)』、紫の禪宗(表No.39)

日本の宗派に関する記事である。まず、「一向宗 (Icoxus)」<sup>(42)</sup>について。リスボア蔵書翰では、Icoxusに下線があり、その説明部分が余白に記されている。一向宗が「僧院 (Mosteiro)」と説明されていることに疑問をもつかもされないが、これは下線を付した者の誤り<sup>(43)</sup>、正確には「一向宗の富田寺内」という名の場所 (a hum lugar por nome Tonda ginay dos Icoxus)」<sup>(44)</sup>の説明である。本来ならば全文に下線を付すべきであった。該当箇所をエヴォラ版書翰で見ると、「一向宗の富田寺内」という名の場所、それは仏僧の僧院である (a hum lugar por nome Tôdaginay dos Icoxos, que he hum mosteiro de Bonzos)」と記されている<sup>(45)</sup>、両書翰がほぼ同文であることが読みとれる。

次に、「法華宗」について。法華宗はリスボア蔵書翰ではともに「釈迦の信奉者」と説明部分にある。エヴォラ版書翰では、表No.17に該当する箇所には「法華宗 (Foqueixo)」<sup>(46)</sup>とのみ記されて説明部分がなく<sup>(47)</sup>、表No.22に該当する箇所はリスボア蔵書翰とは表記の仕方が異なり、以下のようになっている。「日本の全ての宗派の中で最も傲慢で不遜、放埒なのは、釈迦を崇拜している者たちで、法華宗と称する (宗派) です (Entre todas as seitas do Iapão os mais arrogantes, soberbos, & soltos, são os que venerão a Xaquã, & a que chamã o Foqueixos)」<sup>(48)</sup>。傍線部分がリスボア蔵書翰 (são os Foqueixos [cultores de xaquã])<sup>(49)</sup>と異なるが、意味は同じである。

最後に「紫の禪宗」について。これは紫野大徳寺を指す。エヴォラ版書翰では「禪宗」としか記されておらず、「紫」の部分が省略されている。しかし、フロイスが「紫の禪宗」と記していたことは「日本史」から確認できる。該当箇所には「紫の禪宗の僧院 (mosteiro

s dos jexus de Murasagui) 」と記されており<sup>(54)</sup>、リスボア蔵書翰の mosteiro dos Jexus de Murasagui へ一致する。

#### G 神・仏(表No.16, 54)・仏(表No.19)

「神」「仏」の記述は、エヴォラ版書翰には説明部分はないが両書翰とも同文である<sup>(55)</sup>。ただ、リスボア蔵書翰の説明部分がそれぞれ異なっている。表No.19とNo.54は「偶像」と説明されている。神仏のことが「偶像」と説明されることは宣教師の史料にはよくあることで、特に違和感はない。一方、表No.16は「教典」と説明されている。神仏を「偶像」「教典」と説明を変えている点は興味深い。表No.16は信長が神仏を軽蔑していることを述べている箇所に出てくるので、「神」「仏」を偶像と解釈するのではなく、表No.16のように説明したことは的を射ている。また、表No.19は二条城普請に石仏を石垣として利用したことが述べられている。ここでいう「仏」は石仏のことであり、「偶像」と訳したのも頷ける。この事例は宣教師が神仏についてどれほど理解していたかを検討する手がかりになるといえるだろう。

#### H 奈良の大仏(表No.30)

奈良の大仏に関する記述は、信長がフロイスを捕まえて東大寺の再建を強要するという噂が広まっていたことを述べた場面と、日乗の職掌について述べた場面に登場する。リスボア蔵書翰に下線部および説明部分があるのは前者である。

表No.30を見ると、奈良の大仏の説明が「寺院」となっていることに違和感を覚える。しかし、エヴォラ版書翰でもほぼ同文で、「一寺院である奈良の大仏 (o grande Bú de Nára que he hum templo) 」とあり<sup>(56)</sup>、奈良の大仏は寺院という理解であったことが分かる。

後者の日乗の職掌に関する記事のところでは、日乗が東大寺再建の奉行となっていると記されている。エヴォラ版書翰では「奈良の大仏の大寺院 (o grande templo de Daybú de Nára) 」となっており<sup>(57)</sup>、リスボア蔵書翰も同文である<sup>(58)</sup>。ここでも奈良の大仏を寺院として記述している。

#### I 本分(表No.55)

「本分 (Fombun) 」という語句は、フロイスと日乗の宗論の中で登場する。エヴォラ版書翰には説明部分がないが<sup>(59)</sup>、それ以外は両書翰とも同文である。リスボア蔵書翰の説明部分では「本分」を「無のもの (cousa que não he) 」と説明している。「本分」の意味は、『広説佛教語大辞典』によれば「①本来の分際の意。もとからの。真実の。本来のもちまえ。生まれながらに仏性をもっているという人間の本来のすがた。迷いやさとりにかかわらぬ絶対的境界。②本来の心。心の本性」とあり<sup>(60)</sup>、『日葡辞書』では「本源 (primeiro principio) 」と書かれている。リスボア蔵書翰の「無のもの」という説明が、「本分」の一般の意味と解釈上どの程度の距離があるかを明確にすることは難しい。だが、フロイス「日本史」に、リスボア蔵書翰の説明部分と同様の理解がされていたことを示す記述がみられる。そこには「禪宗が本分と称している生命も死もなご一つの混沌状態 (hum chaos que não tem vida nem morte, a quem os jexus chamão fombun) 」とある<sup>(61)</sup>。「本分」には「生命も死もない」とあることから、リスボア蔵書翰の「無」という説明も同様の理解がされて



いたものと思われる。あとは「本分」という言葉の意味を宣教師がどれ程理解していたのかという点になると思うが、それについては後考を待ちたい。

### 3 人名・地名

#### J 人名

本書翰に登場する人物は、多少の綴りの違いはあるものの、両書翰とも日本語表記がされている<sup>53)</sup>。リスボア蔵書翰の説明部分には「本人の名前 (nome proprio)」とあるが、表No.6「池田」の一例だけ「通り名 (Alcunha)」となっている。表No.51の「毛利」の説明が「本人の名前」であるので、「池田」も同様に説明してもよかったはずである。そこで該当箇所を見ていくと、「Iquenda Tangandono (池田・丹後殿)」となっている。エヴォラ版書翰では「Tangandono (丹後殿)」としか書かれていないため<sup>54)</sup>、本来下線部はTangandonoに付すつもりだったのかもしれない。この一例だけでは明らかにできないが、事例F表No.5でも下線部の位置の誤りが認められるので、ここでも同様の誤りがあった可能性は十分考えられる。

他に、イエズス会に入会した日本人のことが記されており(表No.59)、「信者のコスメ (Cosme de Xinja)」と書かれている<sup>55)</sup>。エヴォラ版書翰ではこの箇所はただ「コスメ (Cosme)」としかない。このコスメは高井コスメのことで、一五六八年に同宿となり、一五七三年フランシスコ・カブラルによってイエズス会に迎え入れられた<sup>56)</sup>日本人イエズス会修道士である<sup>57)</sup>。

#### K 地名

地名についても人名同様両書翰とも綴りの違い以外は同文であるが、表No.18「五畿内」だけ両書翰で表記が異なる。該当箇所を引用しよう。

【史料4 a (リスボア蔵)】<sup>(62)</sup>

五畿内 [都の国全体]

Gouinay [todo reyno de Meaco]

【史料4 b (エヴォラ版)】<sup>(63)</sup>

都がある山城国全体

todo o Reino de Iamaxiro, onde esta o Miáco

両書翰とも日本語表記がされており、どちらがフロイス自筆書翰の体裁に近いかは判断しにくい。それ以上に、両者には大きな違いがある。それは「都」の意味が異なることである。【史料4 a】の「都」は五畿内全体を、【史料4 b】はいわゆる京都を指している。実際宣教師は「都」をこのように二つの意味で使っていた。例えば前者は、ヴァリニャーノの設置した三教区制がそうで、この「都」は畿内諸国を指している。一方後者は書翰の発信地で「都発」とあるのがそうである。五畿内では他に堺発、飯盛発書翰などがあり、「都」が五畿内を指すならばこのような発信地の区別はいらぬからである。ただ、どの

ような使い分けがされているかは不明である。

#### 4 その他

「見物」(表No.29, 50)

「見物」という語句はリスボア蔵書翰だけにみられる。しかも、両書翰の表現が表No.29, 50とものに異なっている。表No.29は、フロイスが初めて織田信長を訪問した時の記事の中に見られる。この訪問では信長謁見は実現しなかったが、訪問時には多くの群衆が集まった。その群衆を説明する箇所「見物」が書かれている。該当箇所を引用しよう。

【史料5 a (リスボア蔵)】<sup>(64)</sup>

私には数えることができないほどの見物「感嘆してながめること」をする者たち

*a gente que fazia quenbut lo que olhava respicio cum admirãoe[sic]<sup>(65)</sup> em nym que parecia não ter conto*

【史料5 b (エヴォラ版)】<sup>(66)</sup>

この光景に大変驚いて集まった数え切れないほどの者たち

*a gente que a este espectáculo mui espantada se ajuntou, a qual parecia[sic]<sup>(67)</sup> não ter conto*

エヴォラ版書翰では日本語表記がないが、両書翰とも同内容の記事と理解していいだろう。エヴォラ版書翰では「見物」という日本語表記を避け、表現を変えたものと思われる。

しかし、次の表No.50は表現も内容もまったく異なる。表No.50は、和田惟政が宣教師を庇護したアンタンに対して感謝の意を示した場面で使われている。エヴォラ版書翰ではアンタンに対する御礼しか書かれていないが、リスボア蔵書翰ではその時の惟政とフロイスとのやりとりが記されている。該当箇所を引用しよう。

【史料6 a (リスボア蔵)】<sup>(68)</sup>

二、三日後、(和田惟政はアンタンの)家にやってきて、アンタンに対して、彼(アンタン)が私(フロイス)を自宅に迎え、私のために尽力してくれたことに感謝を示し、国王(織田信長)の一〇〇箱を持ってきました。(その時惟政は)公方様(足利義昭)や尾張の国王(信長)と蹴鞠をするので、見物「見ること」して楽しむため一緒に行くように言いましたが、私(フロイス)は熱があり、扁桃炎を患っていたので行きませんでした。今ならば(その誘いに対して)ふさわしい返答をするのですが。

*& day a dous, ou tres dias veo a casa a dar os agradecimentos a Antão de me ter em sua casa, & do trabalho que comigo levava, & trouxe lhe mil caixas de Rei dizendo me que el le ya iugar a pella com o Cubuçama, & el Rei de Voari que fosse com elle pera fazer que nbut [olhar], & me desenfadar, não fui por estar com febre, & maltratado da esquinencia, que agora assi dignamente me acode.*

【史料 6 b (エヴォラ版)】<sup>(30)</sup>  
二、三日後、彼(和田惟政)はここ(アンタンの)家にやってきて、アンタンに対して、彼(アンタン)が私(フロイス)を自宅に迎え、私のために尽力してくれたことに感謝を示し、彼の施しと同等のを行って応えました。

& dahi a dous ou tres dias veo aqui a casa dar os agradecimentos a Antão de me ter em sua casa, & do trabalho que comigo levava, satisfazendo lhe tambem por obra conforme a sua liberalidade.

和田惟政が、アンタンにフロイスを庇護した御礼をする記述までは両書翰とも同一である。しかし、リスボア蔵書翰では、その後惟政がフロイスを蹴鞠の見物に誘う記事が追加されている。エヴォラ版書翰では、この箇所が省略されていたことになる。【史料 5】と併せて考えると、「見物」という意味が分からず、省略されたことは明らかである。

#### M 狂言・舞(表No.33)

「狂言」については両書翰に見られるが、「舞」はリスボア蔵書翰にのみ見られる。両書翰ともほぼ同内容であるが、表現が異なるので取り上げる。

【史料 7 a (リスボア蔵)】<sup>(31)</sup>  
当所で夕食をとり、いつものように音楽、狂言、舞「踊りの集団」、肴、その他こうした祝祭に必要なものが供された。

jantarã aqui avendo suas acustumadas musicas quioquem May [Baillas deputaçam] sacanas & o mais requisito de semelhães festas:

【史料 7 b (エヴォラ版)】<sup>(32)</sup>  
当所で夕食をとり、いつものように彼らが狂言と呼ぶ舞踊や音楽、馳走、その他こうした祝祭に必要なものが供された。

jantarão aqui avendo seus costumados bailos, a que elles chamão Quiogen, musicas, iguarias, & o demais necessario pera semelhantes festas

「舞」「肴」が馴染みのない語句だったのか、エヴォラ版書翰では【史料 7 b】のように省略あるいは変更が見られる。

#### N 取り合わせ(表No.12, 44)

和田惟政が信長と足利義昭にフロイスを紹介する場面で使われている。エヴォラ版書翰では、表No.12は *dar a conhecer ao Nobunanga* 「信長に紹介する」<sup>(33)</sup>、表No.44は *pera lhe dizer quem eu era* 「彼(足利義昭)に私(フロイス)が何者であるかを知らせるため」となっており<sup>(34)</sup>、両方ともリスボア蔵書翰の説明部分とほぼ同文である。

#### O 庭(表No.20)

二条城普請の記事に見られる語句で、エヴォラ版書翰では *hum lugar para passear* となって

いる<sup>(84)</sup>。意味は「散歩するための場所」とあるので、「庭」の説明として正しい。エヴオラ版書翰では、Nivaの意味が分からず書き換えられたものと考えられる。

#### P 畳(表No.31)

リスボア蔵書翰ではTaramis [colchoes de palha]となっているところが、エヴオラ版書翰ではcolchões de palha que ca chamão Tarami (「ハハ」は畳と称するわらのマット)となっており<sup>(85)</sup>、表記の仕方が異なるが意味は同じである。

#### Q 乗り物(表No.36)

リスボア蔵書翰ではNorimono[palanquin]となっているところが、エヴオラ版書翰ではhu n palanquin a que elles chamão Norimono 「彼らが乗り物と呼ぶ駕籠」となっており<sup>(86)</sup>、表記の仕方が異なるが意味は同じである。

#### R 盃(No.35)

フロイスが足利義昭を訪問したが、義昭は引見せずに乳母が応対した。エヴオラ版書翰では記述はそこまでだが<sup>(87)</sup>、リスボア蔵書翰では謁見の際「盃」を受けた記事が付記されている<sup>(88)</sup>。

#### S 勧め(表No.46)

フロイスが足利義昭への謁見が実現した場面の中で、義昭がフロイスに酒を飲ませるよう和田惟政に「勧める」ところで用いられる。両書翰とも同じ意味であるが、エヴオラ版書翰では「二度勧めた (por duas vezes persuadio)」とある<sup>(89)</sup>。リスボア蔵書翰では「二度」を書き漏らしたものと思われる。

#### T 人夫(表No.7)

エヴオラ版書翰ではhomens (人)となっている<sup>(90)</sup>。「人夫」の意味が分からなかったため、書き換えられたと思われる。

#### U 礼(表No.26, 34)

No.26, 34ともにエヴオラ版書翰ではvisitarとなっている<sup>(91)</sup>。

#### V 両書翰同文のもの<sup>(92)</sup>

肴(表No.10) / 尻切(表No.21) / 屏風<sup>(93)</sup>(表No.25) / 食籠<sup>(94)</sup>(表No.28) / 法華経<sup>(95)</sup>(表No.52) / 談合<sup>(96)</sup>(表No.53) / 風気<sup>(97)</sup>(表No.58)

#### W エヴオラ版書翰では、リスボア蔵書翰の説明部分の語句に改変されているもの<sup>(98)</sup>

肴(表No.4) / おかしいこと(表No.27) / 氣遣い(表No.32) / 土産(表No.37, 47) / 尻切(表No.43) / 珍しき(表No.49)<sup>(99)</sup>。

## おわりに

本章では、リスボア国立図書館所蔵一五六九年六月一日付フロイス書翰に見られる日本語表記に注目し、従来引用されてきたエヴォラ版書翰との校合を行った。その結果、エヴォラ版書翰とは異なり、数多くの日本語表記がされていたことが明らかになった。これは、フロイスが書翰の中で日本語（ローマ字表記）を多用し、受取手の宣教師もこれを理解していたことを示している。宛所のベルシヨール・デ・フィゲイレドは、永禄七年（一五六四）に来日しており、この時は豊後に滞在していた。日本語もある程度理解していたものと思われる。そのため、フロイスも遠慮なく日本語表記で伝達したのであろう。このことは、日本国内の宣教師の間では、ある程度日本語による伝達がなされていたものと推測でき、外国人宣教師の日本語習熟度の高さが窺われる。イエズス会宣教師の語学力を問題視する向きもあるが、本章で明らかにしたことからも分かるように、こうした見解は再考しなければならない。

その日本語表記を見ていくと、布教上重要な政治・宗教関連語句や、日常生活に必要な語句が目立つ。とりわけ前者は、日本での宣教活動における重要語句として理解されていた可能性が高い。イエズス会宣教師は来日当初から日本の宗教事情はむしろんのこと、日本の国家・権力にも注目してきた。その把握のために、現地語である日本語習得および日本語理解を進めていったものと考えられる。こうした目的のもとで習得された日本語による表記は、宣教師の国家・権力者認識を検討する上での一指標になる<sup>83</sup>と考えている。

また、宣教師の日本語表記は当該期の日本史研究にも役立つ。本文でも取り上げたが、和田惟政の「副王、総督」の解釈はその顕著な例といえるだろう。これまでエヴォラ版書翰のみでの議論であったため、「副王、総督」について様々な解釈がされてきたが、リスボア蔵書翰によって「守護代」を指すことが明らかになったわけである。

日本では、エヴォラ版日本書翰集に依存した研究が続いたが、本章でも明らかにしたように、同史料集では日本語表記が編纂過程でポルトガル語に改められていることから、史料価値としては先学の指摘通り二次史料に位置すべきである。イエズス会史料の利用価値を十分に活かすならば、本書翰の場合リスボア国立図書館所蔵書翰の方がはるかに史料価値が高い。イエズス会史料を日本史の一史料として位置づけるためには、本章で検証したような原文書や他写本の校合を行う必要がある、それによって日本史研究に有益な史料として、その価値が高まっていくものと考ええる。